

令和4年度第1回佐賀市地域包括支援センター運営委員会 紙面会議

委員名	議題ページ・番号	意見・質問	回答
牛島委員	8 ページ (1) -①- f	<p>城東地区の認知症地域支援について</p> <p>住民全体で有志が集まってオレンジカフェを2か所開催されているとのことで素晴らしい。認知症サポーター養成講座を小・中・高校での開催、劇を通じて出演者も高齢者と共に学んでいるとのこと。令和4年度もさらに充実する計画をされています。</p> <p>我が地域でもなんとか養成講座をしっかりとすすめていきたいと思っていますところでは。</p>	<p>城東地区は、地域での認知症支援に対する意識の高まりがあり、地域住民、自治会やまち協等の組織、公民館、学校等、地域で一体となって活発な活動が行われています。</p> <p>市内のそれぞれの地区でも、認知症サポーター養成講座やステップアップ講座等をとおし、市民や関係組織等に認知症に関する知識と理解を高めてもらうことで、認知症になっても安心して過ごせる地域を目指して活動していきたいと思っております。</p>
坂井委員	17 ページ (1) -③-a	<p>一般介護予防事業にリハビリ専門職を活用していただければと思います。また、通所型サービスCに関して、利用者が少ない原因はあるのでしょうか。</p>	<p>現在、一般介護予防事業のセンター版元気アップ教室において、理学療法士や作業療法士などの専門職による運動指導を取り入れています。</p> <p>また、通所型サービスC事業の利用者が少ない要因は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 短期間の集中的サービスの結果、改善した機能を地域活動の中で維持できる者を対象としていることから、利用者が限られる。 ・ 事業所が少なく、受け入れエリアが限られることが考えられます。 <p>今後は専門職のみならずと連携を取りながら、事業の推進を行っていききたいと思っております。</p>

委員名	議題ページ・番号	意見・質問	回答
山下委員	17 ページ	<p>コロナ禍となり、様々な介護予防・地域の事業などが中止や縮小となり、人に会う機会を減らすことがよいという風潮の世の中になっていました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会との繋がりが減る→生活範囲が狭くなる→動く機会の減少→運動機能の低下 ・話す機会の低下→口の機能の低下→食べることへの影響→低栄養→筋力低下 <p>と、ドミノ倒しのように悪い連鎖となってしまう、コロナ禍3年目の現在も高齢者の生活に影響が続いています。また、不安やストレスといった要因は認知機能にも大きく関わっている印象です。</p> <p>R3年、R4年は多くの事業が実施計画されていることが分かりました。感染対策を取りながら一つ一つの事業が実を結び佐賀市の高齢者が住み慣れた地域でいきいきとした生活が継続されるよう私どももサポートできればと思います。</p>	<p>コロナ禍であっても、元気アップ教室や音楽サロン教室などは、通いの場として介護予防の重要な取組であることから、できる限り開催したいと考えており、新型コロナウイルスの感染状況を注視し、感染対策を行いながら実施しています。</p> <p>高齢者が住み慣れた地域でいきいきと安心して暮らしていくために、今後も医療機関や介護施設、おたっしや本舗等、日頃から地域の高齢者を支える方々のご支援・ご協力をお願いいたします。</p>
松本委員		<p>新型コロナウイルス感染症が流行したことによって各包括支援センター事業所に影響があったら教えてください。</p>	<p>令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の急激な流行に伴い、地域での集いの場の開催や講座、研修会、地域ケア会議等が一部延期または中止となってしまうました。施設での面会制限や訪問時間の短縮等で、十分な情報収集や支援ができない事もありました。できるだけ地域活動が停滞しないよう、また高齢者が閉じこもりによって機能低下を招かないよう、感染予防や拡大防止に配慮しながら活動を行いました。</p>

委員名	議題ページ・番号	意見・質問	回答
松本委員		<p>佐賀市以外の包括センターの活動報告等の状況がわかればありがたいです。参考になればと思います。</p>	<p>佐賀中部広域連合のホームページに、「介護保険運営協議会」の資料が公開されております。連合管内地域包括支援センターの運営状況が年度毎に確認できますので、ご参照ください。</p>
友安委員		<p>現状を実感する人材の裾野を広げる必要性について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者が固定している <p>介護支援や予防活動の多くの現場は、昔の婦人会等で活躍されてこられた方々（殆ど70歳以上女性）が重複して参加しているのが現状です。人材の裾野を広げる対策が不足していると感じます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名称が参加のハードルを上げている <p>「認知症」や「介護」といった言葉がついているだけで、認知症が進んだ姿とイコール「下の世話」のイメージが直結していて「関わることに腰が引ける」という声を多くの男性から耳にします。現在活動中の限られた層の方々の多くが10年もしないうちに「支え手」側から「支えられる」側に移行する可能性が高いと予想される今、顕在化する前に対策を行うことが直近の課題でないでしょうか。</p>	<p>定年延長等で、今後益々地域で元気に活動できる人材が不足していくことも懸念されます。更に核家族化が進むことが予想される中で、「ご近所の力」を再認識し、「支える側」と「支えられる側」、地域での世代を超えたつながりが継続できるよう、若い年代からの地域活動への参加等、早急な対策が必要と考えます。</p>